

P3-13-8 Office gynecology における子宮腺筋症に対するマイクロ波子宮内膜アブレーションによる過多月経治療の検討

山王レディースクリニック
津田 晃

【目的】子宮腺筋症によって生じる過多月経に対してマイクロ波子宮内膜アブレーション (MEA) と経頸管的マイクロ波腺筋症融解術 (transcervical microwave adenomyolysis : TCMAM) の併用治療が, office gynecology における日帰り治療として有用性か否かについて検討した。【方法】子宮腺筋症による過多月経と診断され, 当院で MEA に TCMAM を併用したマイクロ波治療を受けた 25 例 (平均年齢 45.5 歳) を対象にした。マイクロ波アブレーター先端を円錐形に加工し, 経腹超音波ガイド下にアダプターを用いて TCMAM を行った。TCMAM 施行に際しては患者の同意を文書で得て行った。麻酔は硬膜外麻酔を行い, 全例日帰り手術で行った。【成績】平均手術時間は 25.0 分であった。MEA の照射時間は先端 40W で平均 400 秒, TCMAM は平均 315 秒であった。貧血は術後 3 か月で有意に改善した (9.6 ± 2.9 vs 12.8 ± 1.3 g/dl; $p < 0.0001$)。腺筋症病変の経時的収縮率は, 3 か月で平均 68.6%, 6 か月以上で 75.5% であった。術後 3 か月で月経量が 1/5 以下 (VAS score ≤ 3) に減少した著効例は 24 例 (96%) で, 月経痛が 1/5 以下 (VAS score ≤ 3) に減少した著効例は 21 例 (84%) であった。また, また満足度 (VAS 満点 10) は平均 9.8 であった。【結論】子宮腺筋症に対して TCMAM を併用した MEA は有用であり, 閉経周辺期の過多月経患者の子宮摘出術の代替療法となり得ると考えられた。また, office gynecology における日帰り治療が可能であると考えられた。

P3-13-9 子宮腺筋症に対する経頸管的マイクロ波腺筋症融解術・マイクロ波子宮内膜アブレーション併用療法の効果

医誠会病院
金岡 靖, 井本広済

【目的】腺筋症に対して, マイクロ波子宮内膜アブレーション (MEA) と経頸管的マイクロ波腺筋症融解術 transcervical microwave adenomyolysis (TCMAM) とを併用した成績を検討した。【方法】2010 年 6 月以降に過多月経を治療した子宮腺筋症患者のうち, MEA と TCMAM を併用して治療し 1 年以上経過した 63 名の記録を検討した。検討項目は, 治療前後の画像から評価した子宮体部体積, ヘモグロビン値, 治療前を 100, 無症状を 0 とした visual analogue scale (VAS) を用いた月経出血量と月経痛の評価である。MEA と TCMAM には 2.45GHz のマイクロ波手術器と MEA 用マイクロ波アブレーターおよび直マイクロ波アブレーターをそれぞれ使用した。TCMAM の併用については倫理委員会承認済みであり患者からインフォームドコンセントを得た。【成績】子宮体部体積は術前 296 ± 198 cm³ (MEAN \pm SD), 3 か月では 180 ± 132 cm³ ($P=1.1E-9$), 12 か月では 174 ± 140 cm³ ($P=2.4E-8$) と有意に縮小した。ヘモグロビン値は術前 8.0 ± 2.5 g/dl, 術後 3 か月では 12.5 ± 1.8 g/dl と有意に ($P=3.8E-17$) 改善した。3 か月と 12 か月の VAS スコアは, 月経出血量では 20 以下, 月経痛では 40 以下までそれぞれ改善した。術後には 3 例で子宮内壊死組織に感染が発生したが, いずれも経口抗菌薬により軽快した。1 例で過多月経の再発のために子宮摘出術を術後 20 か月で施行した。【結論】MEA + TCMAM は腺筋症による過多月経と月経困難症を改善し子宮体部を縮小させる。

P3-14-1 糖鎖を mimic するペプチドを用いた抗腫瘍薬

浜松医大
柴田俊章, 杉原一廣, 村上浩雄, 田村直顕, 伊東宏晃, 金山尚裕

【目的】悪性腫瘍の細胞表面に発現する糖鎖抗原は腫瘍の性状と相関するが, 糖鎖そのものを薬剤として癌を治療した報告はない。その理由は, 複雑な糖鎖を簡単に合成できない技術面での課題がある。我々は癌細胞表面の糖鎖構造と血管内皮細胞表面に発現する糖鎖認識受容体の相互作用を解析する過程で, 腫瘍新生血管内皮に発現する Annexin 1 特異的に結合する糖鎖模倣ペプチド IF7 (IFLLWQR) を同定した。このことは, 腫瘍形成に係る新生血管を標的とする IF7 の有用性を示唆する。実際に, IF7 と結合した抗癌剤は腫瘍にのみ集積し, さらに投与量を減量しても顕著な抗腫瘍効果を示した。本研究では, IF7 の成果をさらに発展させ新規抗癌剤の開発を目指す。【方法】抗腫瘍薬として SN38 の他にパクリタキセルを IF7 と conjugate し, DDS 型分子標的治療薬を合成する。新規薬剤と既存の薬剤を組み合わせた多剤併用療法を含め, 婦人科関連腫瘍に対して薬理効果の検証を行う。この際, in vivo での抗腫瘍効果のモニターを可能にするために "in vivo イメージング" を用い正確に評価する。【成績】IVIS[®] Imaging System で IF7-SN38 の抗腫瘍効果を定量的に計測した。IF7-SN38 を担癌マウスに投与すると腫瘍の増殖を抑制し, 腫瘍の完全な消失も in vivo イメージングと病理組織学的検討で確認した。さらに, 投与量を推奨投与量の 1/40 まで減らしても十分な抗腫瘍効果を示した。現在, IF7-タキソールの効果判定を進めている。【結論】マウスで副作用のない優れた抗腫瘍効果を得た。さらに新規薬剤の薬理効果を報告する。